⑧地域の相棒の現場から（1）

地域の相棒の現場から、ということで所属法人の業務から、デジタルに関することを書く。今回は「デジタルな仕事をつくる」ことをテーマとしたい。

筆者は2011年に発生した東日本大震災のボランティアがきっかけとなり、故郷である陸前高田市にUターンをしたが、その頃から「デジタルに苦手意識を持つ住民が多い」と感じていた。当時は全国、世界から支援の手が伸びていたが、連絡や資料作成の手段として、メールやPDF、Word、Excel等のデジタルが主であったため、折角の支援が届かなかったり、あるいは途中で駄目になったりすることが発生していた。また、制度や助成補助金など被災した事業者が活用できる支援策も多くあったが、そもそも普段インターネットを使わないため情報を知らない、知っていても申請書をつくるのにWordやExcelが必要であるため諦める、といった機会損失が起きていた。

とても印象に残っていることとして、実父が「商工会からの紙資料を待っている」と言っていたことだ。私の実父は比較的新しい物が好きで、普段からインターネット等のデジタル活用をしている方だと思っていたが、その実父ですら主な情報は紙であり、取得方法も受動的だったことである。

所属法人の仕事風景、デザイナー、コーダー、ライター等のデジタルな仕事をこなす

今後の復旧、復興に向けてたくさんのモノ、コトが必要だが、そのなかのひとつとして「地域のデジタル化」がとても重要である、と前述の経験から思い、取り組みの核として始めたのは「デジタルな仕事をつくる」ことである。デジタルに苦手意識を持つ住民を変えていくためには、講座や研修等も必要だが、そもそも「デジタルな仕事が少ない」ため、デジタルが得意な住民が増えない、かつ、相談する先も身近にいないためデジタル活用が進まない、という状況があると考えた。私は元々ホームページ制作の会社を起業していたこともあるため「まずはホームページを地域内で制作できるよう、デザイナー、コーダーを生み出す」ことを決心、動き出したのが約10年前である。

何事もそうだが、言うは易し、行うは難くである。当時、この地域でデザインの仕事なんて成り立たない、ましてやコーディングなんてもってのほか」と、常々周りから言われ、当初は仕事以前の問題で、デザイナー、コーダーをいちから育成する必要があった。しかし、初志貫徹、ありがたいことにデザイナー、コーダーにとどまらず、記事を書くライターという仕事を生み出すことができ、雇用をすることができている。そして、狙い通り「デジタルが得意な住民を増やす」ことへの効果を日々実感している。今後10年は地域内だけでなく、都市部からの受注を視野に入れ、より多くの「デジタルな仕事をつくる」ことに精進したい。

【一般社団法人トナリノ】
SAVE TAKATA（セーブタカタ）が前身組織。「地域の相棒」を合言葉に、広報物制作、商品開発販売、事務局広報代行などのサービスを、分野や地域を超えて提供。ICT支援員4名が所属、デジタル人材の育成にも注力している。事務所は高田大隅のたまご村内のコワーキングスペース「ヤドカリ」。電話番号は47・3287。

執筆者
トナリノ代表理事
佐々木信秋